

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5



L912
4



5304

序

此所記の事は予の所記に志後
 往する所を記し、月を記し
 年を記し、事を書き、其の佳句を
 記し、評する事、予も亦
 この中を記し、その事、予の
 所記に記し、其の事、予

六ふらたらの花をねむる
春のあまふく知るまゝ
あまふく見清るまゝ
志はるまゝ花をねむる
路は行舞の河は流るまゝ
月をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる

花をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる
花をねむるまゝ花をねむる

かゝるもの井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるを
見るといふ事なすまへ
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは

かゝるもの井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるを
見るといふ事なすまへ
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは
あつたやうな井もさうあるは

命一をいぬその序を
 のい海雪野序に河し
 世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる

世宗卷十の記

世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる
 世のいなるいなるいなる



文流齋

蓼衣画



壩雞井

埋井や壩う縁々世ハ苔の露 蓼衣太

月ノうかて系 碑を 鑑 耳谷

秋の風吹く 神田 括々 一 北

漲々 ぬ 籾 本を け 捨々 三 駱

か 中 習々 小 籾 の 早 百合 杜 有 其 牛

朝 釣 の 膳 孔 淋々 け け 一 菓

米の器も倫旨忘るぬ旅旅と
母越おと詠く船梁能後
陸吼と、衆ふくと、並渡し
眞下つくく齋能百も空
元張のいし形母くかこあり
書ささく免よ空女はくく
段印くく崔小弓以的うけ
こ海邊て梅の月自ふた空

吟 巢 牛 駱 北 谷 太 吟

茶嘆いのなうく大和めくく
あまうくく我瘡わきく
天琴織く十手能工更織お母中
切大をくくく空とくく
後には孤ちやめふ厥の牝いれ
若れれすくく杖ありしよ
今更にうくくなふ髪判結く
あまうくく少室城き山ありて

牛 吟 巢 牛 駱 北 谷 太 吟

引子うゝ紙魚の尸うち老ひ
まゝ還俗に何しきさめ
さるるうの浪ありもあま可位
傳へておれまゝまゝぬ
まゝありて茶碗の縁城ありし
長き屋敷とてふおのほろり
宇治ま情ありて月あり糸
おろりて秋のうゝ色初つ

谷 太 吟 繁 兆 巢 大 谷

ナウ

携ひてとて強くぬ菊草翁
僧の元氣をも何うの
仕立を孔裁とておのほろり
今一竿と十歳盤に
秋燈のふちの糸は拙なり
朽らうとておのほろり

執 筆 駱 吟 兆 牛 巢

新の万、後書の成子に京臺
 渡ぬめと小神とくく系
 いつうく帆うくふ船に渡る
 出たあふくちうめ捨垣女の歌
 昔まきまふふさあしきんき
 干葉舎、海に融る群立
 角力取人形あふ母屋々
 龍葉下、波く香月の門
 牛 太 巢 此 鮎 谷 太 牛

片町ハ物孫海流の川傳心
 まく細うけく海葉のまき
 人ハこまきめ伝音のいそむ
 二 二日あふのききせとてた
 信よせく讀まきふくもすか
 とくせあまくとぬのあま
 實方の塚あふくぬふか
 令ハみぬの紅粧雲にゆく
 牛 太 巢 此 鮎 谷 太 牛

武家

みきくきくふくみくきく
ほむくくくくくくくく
あるくくくくくくくく
あきくくくくくくくく
時中の奏くくくくくく
くくくくくくくくくく
朝夕にふり向くくくく
角大屋の床に坐すくく

粟 太 谷 牛 太 北 粟 船

飲不くくくくくくくく
飲まらうくくくくくく
きくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

牛 谷 太 北 粟 船

海

八百里とすくく一瞻望も今も
富家民家造りし武の烟
かくくくかこれ海あり
りりりりんまといえん
村さき海ありんまといえん

あつて海も月やうな信の海
あつてくし

海ありんまといえん秋 蓼太

黍の上 風を喜ばふ 一巢

旭まき月ちのくといえん 耳谷

海ありんまといえん 一兆

回糸の汗の真まのく下 三駱

海ありんまといえん 其牛

百八十一

西の日は峠の小屋に控電
あゝと塔より手紙一本
森色一々おちたもなる約さ
水梯入る志々盤山休
下海のふらぬもさぬ美さ
福をんはうらふお団
うらふふ知の念の池の月
陸すおふ視編者なり

巢大北谷牛駱太谷

自書して割符紙神系及紙し
獲の熊死尺とつてふ表
紀の山死系の手々漱き坂
神樂も案の江まらゆつ
さうめの英人なりしうまのま
いさふすくれさす感話さや
つぎくとらやあさのこまき
おのめく梅のまをき

牛巢駱太谷巢駱

百八十二

十一

狭山

氏孫野也誰兒孫くそほの月	三	鯨
ふ二ひさし遠に思くしのちか月	一	北
焚きくしのあまふ海りり后の月	五	嶺
志くこのまほもまあしほの月	七	宗
危くぬまふ海ちくしの后の月	一	巢
堪くもて尾まあらんのちの月	其	午
后の月更くもあふ入光の那	耳	谷



むくくくくくくくくくくくくくく	武府中	巴陵
炭焼も木の煙をくくくくくくく		白牙
重層に銀も雪まの光くく		有菟
梅咲やあけりにけぬき煉の徳		季煉
あけくも毛麻笛むくく麻ひく		白圭
川まに鴨の流くく破田小		柳水
笛吹の砌ハきくくく復祢乐		柳花

武蔵山

あゝいふくすく香不破のあざふ 可交

木のしや意く吹くもいふふ 一蕪

明あまよおのまきや館の歴 貫十

多仙やまの種にちる日のちく 松茂

意うく保くくふふいふ

徳倉御殿の抱女町く

今ハ田野に荒垣ありて

秋のまよく未枯たう

頼傾廓の付も眼のあゝり

那もあめりい送るもいふ女事茶 兼太

今ハこのまふに指切や村まき交 一兆



若きまきく枯あや后の月 翠兒 常陸竜ヶ崎

着飾ハ多田にちりぬほのま 太如

初お後おの種の中く砧く助 班意

碧ふくくあめりくくめ糖粒瓶 窓五 安藝彦彦

内庭も見えく竹うさの木樵山 大湖

花屋の羅ハあめりくく木風のま 睡席

上徳登戸

秋をちやふる風や古帆行帆 一 轆

萬葉や是も目か春門遠し 信列松代 秋羽

堀籠井

堀を袖に挟くやも流るる處 三 駱

遊るや流くて勢も海 全

むく白府中の人とて
いそふりれて玉川は極ふ

玉川やふる流の秋船は秋 一 兆

流布の侍ふし 漸々の船 夢 太

多梅村

里人々秋の御供は方平記 全

を昨一花に録の二風を
さしはるる事なやとありて

恙やちそのに碧山の深う船 耳 谷

舟船や旭にかしらゆり掛へ 秋 風 吟

舟のり志ある小椀のあま 一 巢

水干や蒸らちこぬきふ掛子 其 牛

○

ふ木果の村に深き赤松 東武 南風

逢坂の清き一筋に注ぐ河 桃宇

細帯のりふ六輪合つて文衣 草坡

二月河のそとに月おぼえのり 四明

黄色の葉をそとにえぬ菊合 星衣

あさくらと一度のさくら月日小 群人

名は江のそとに浮世のそとに月日小 玉卮

そとにありあけのそとにや巨龍に小傾城 楊江

あらしとそとにそとにそとにそとに 五嶺

おとふ山をくるとそとにそとに 杖笥

そとにそとにそとにそとにそとに 馬曉

そとにそとにそとにそとにそとに 意馬

そとにそとにそとにそとにそとに 山口

そとにそとにそとにそとにそとに 上生庵

そとにそとにそとにそとにそとに 棧柳

そとにそとにそとにそとにそとに 可量

百友一々ありてその術室は 其牛
物也や種々ちの繁る 耳谷

詠り

若くは鶴もあつらぬまの白 一巢

○

寺心より筆に海はくこころ 雨静

時香もさるる可なりと 巴夫

若くは鶴もあつらぬまの白 紀名

安の枝と登るハ枝のかられり 逸賀

一二寸長とて一リ中庭の意 涼考

笠橋に巴う時とやかと 混一

おそくともくまの梅黒し 月を

海末の望人進ふや友の月 阿也足

急孔者とも結一鳴子 幸馬

初秋やふともあまの杜 方菴

あふその一徑くりぬ 初橋 故流

あつらひに田上のふかき水 沙羅

川邊水

月越いさよふらふ川のありて 夢太

途ありや指ささるる村尾 一兆

鳴子城のりる時

里八ヶ敷の山を考ぬき 夢太

先ぬき武蔵中の武蔵守

雲の名はさるるのしるすの秋 兵牛

折て折折て折折るふらふ 耳谷

畏の事てのりぬき 一巢

志のりや花く松の下も 情木

もつらも及連ぬし 富呼

武蔵守の抱いては好

来て見よとては字子やふの者 雲飛

美の事や花のぬき 涼宇

夢さし那の名もふえて 芳水

秋浅松子て送ふきぬ今 秋戸

武蔵みかたさし

東武

今いもる布目瓦や神くく文来

あふ〜〜

擲ハ尾もうちゆ〜秋孔お夢太

畑におる人の馬さよはの秋自夕

森に居るう〜山〜茶の山志山

かの〜とあのかさよ杜自溪

葉種をもむ岸光

和とわともを〜馬徳

咲梅よ竿投〜笑梅

深館や小町う糸結沙橋

世の中お初ても竺葉

あ〜さ〜明江

夫ちらう梶丸

田ちら蓼阿

山間の松を採れぬちやむらに 蓼衣

野鳴して草物成る日たしむ 吹石

雪の積る日かけをふらぬ 彭壽

つめて頻るをふるふ葉ふら 夫水

ふちをわうくくもてなまよひ 文母

○

信州善光寺

汲て清みすつる能新小 猿丸

まの月上りの鼓文しりぬ 柳莊

百合のふらふきあるき例ぬ 米屋

去風や長層控ゆく星高き 九郎

あまやま遠里能あつた 呂吹

晴陰や一筋町のぬつとま 島娥

古程越をわくし歩け男小 梧象

言松や遠きるをけ秋の雪 巴明

晝ふらふきあるき能ぬ帳小 杖老

ふちやまきしりぬ波り月 葛人

明月のまゝに居るをばり 月巢



松をわさう使船中扇の形 身谷

身振ふさる程瀧の草の露 一巢

大寺や飯の余り越つ酒 其牛

卯のふり寂光院の月お小 駿嶋田 千布

能すいささきささくや世の夢 全 周丈

軍中の草洗らんちの流 一紀

宗祇江沙の飯茶を造り
親きまをり

世のふささきも宗祇の合ふ 三駱

日枝くく八劫海くき松の茶 魯洲

神摺るるふささき梅の葉 月窓

炉のやふささきあてある帳の 班石

はあは底るあはめ草の葉 祇風

枇杷のふささきを来見せしめ 和水

秋の音を浪絶ちてゆくまふあ
 横よのそとに舟中のま刀ハ
 秋風あらしは浪波や弱は所
 朝風あやむるうらみあめあはれ
 朝風あやむるま風あらし
 るの波あらしあやむる
 飛也て時とあつき鳴蛙
 玉勢あつて谷七つとあらし

千尺
 斗海
 悪水
 梅香
 玉宇
 児啼
 可圖
 藤住

舟もあつて初織あや二日月
 一寸のあつてあらしのま

其牛
 吏曉
 心武
 遠知
 得魚
 班象
 虚舟

常以望之つりそのかみ危 一路馬

秋風のそよそよ見ゆ是津河 文里

そよそよそよの秋の糸まきし 普成

秋軍塚

色如しの松河舟君う立際 蓼太

葉あらし雲てりふの秋や菊白 流光

おも又隣河舟は雲梅不 其禮

眼より糸まきの秋の雲分不 蘭守

麻のあまふあまふあまの秋の風口

秋かきも秋かきも秋かきも秋の汀雨

古今秋負くとも秋かきも秋の分乏

明月や酒海きくも秋かきも秋の百鏡

魂極中十もと秋かきも秋かきの大黙

末枯ややも秋かきも秋かきも秋の外

秋かきも秋かきも秋かきも秋の北魚

時多し秋かきも秋かきも秋の美休

末枯や空の柳引籬を 奇耳

只るの清浄の空の影 點我

忘るの忘る葉の影の影 白麻

明月や垣川の咽の橋に舞 木馬

半月の曲や空の砂の影の影 蓼二

月影のたぬく空の影の影 蘭秀

芳野の松の影の影の影 季鳴

厨中ふゆの
影の影の影の影

柱の家桂の影の影の影 蓼太

傾正のふ帷子の影の影 其牛

燈の影の影の影の影 一葉

何となくの影の影の影 耳谷



明月の影の影の影の影 成美

表の影の影の影の影 寸斗

福の影の影の影の影 一成

多し梅を志しし露の野山に 麦宇
 幸色や燈を眠れおの霧 之阿
 赤あふ梅場の杭と夕細線 嵐言
 海月くく海と来りぬを風 阿人
 不事鏡よらん星むらり 世後府内 馬耳
 ことほくの秋とくもたは初嵐 木奴
 雪水の竹越つらん竹婦人 巴人
 人くともまじはたじく

燒船やつ戸木上くる秋のぬ 夢七
 卯へのおく道はらん鳴るら 芥菰
 去つ秋やあくる明残る蓬不 宜者
 明月やなくるもをの在ぬ一夜 菊太
 親と子の二階よから船舟来 子興
 梅くまやあまの風花志つて路 雪珊
 赤んちなるもめはくし初梅 官前
 月更く雪くしうふ水る歌 音雨

明遠く白くふたつ〜菊のふ 耳谷
町中城古跡遠くゆき月あ 一巢
又の回あつ回りゆ 衣くし里 具牛

海堂や笑つ〜まも 修々 遠別東 菓多主

強十日茶たのき〜夏つ 田植山 後根方 茶鶴

唯望つ〜葉氣の結あゆみあま 房別天津 可山

夏〜も又葉くあま〜あま 今 鷺丘

あ〜〜き草つるの池能草葉 全 浦壽

山里やあ〜つ家あめと梅の意 上徳小系 鬼友

朝あつ火越つ〜ふあ 朝の歌 下徳小系川 頓吾

里能灯の光え〜も遠く麻の意 全 卧牛

まね〜ふふき越ほと春の意 全あひ草 鷺泊

あ〜あや花つ〜河邊と 提手桶 全福木 都木

控子今〜も望の意〜十ねふ 具牛

るの強〜あふあゆや猫の意 一巢

雲の影とふ葉の入る草花の家 耳谷

空のくさくさな葉の初時雨 飛後 官業

雲の葉は隣りあり冬草 播列加吉川 青羅

海は浪もまよひて暮る夕の影 飛前 杏扉

細き汁のくさくさな隣りあり 洛 儿董

あつたけしむらさきとあつたけしむらさきの音 全境 蝶菱

笑ふ雲は秋の車押りありまきの音 近江栗津 童厚

菊の葉の葉のくさくさな色 近江栗津 沂風

猫の息はくさくさ人のくさくさ 浪花 杏庭

志くさくさや螺は町越ねて 全 丁江

石火矢の舟あそびをまねて 全 ふさふ

春の波は口楊のさほえ 全 竹阿

梅の葉はくさくさ流るる 河内 暮風

さくさくさくさくさくさ 全 玉牙

男の似顔 全 風車

女はくさくさくさくさ 全 漁船

あけのぼるやなほんぬくのき 司丸

春櫻くさの男言やをの翁 一鼻

子成つきて精きうめい原 其牛

夕くちの春櫻塚の男ふ事 耳谷

やうあはれや翁もなを初お翁 可次 東鼻

初まゝの妹くさ母の命ふ事 盲人 如醫

あけのぼるやなほんぬくのき 甲列 珊瑚

○

あけの燈の休も。新や里神楽 素丸

世の外に翠や翁眠る所をうか 秋泉

あやめあはれ言のあめ白門はら 終文 金生

あけの眠るもあはれ翁の翁 甲列 義六

あけの翁もあはれ翁の翁 近江日登 素丸

あけの翁もあはれ翁の翁 新着後書 春江

あけの翁もあはれ翁の翁 全 万都

あけの翁もあはれ翁の翁 武府中 孤舟

細木の葉を縁に上りて花を看る家 全 丁子

炭竈の火をきく早き山崎 全 千里

子持の山崎に居る清水 全 鳥籠

一河に柳河にあり言の上 全 轍子

編書のおり入り 全 五の尺 むら 松傘

舞於葉の荒削り

三つ足お湯をいりあぶり

何処にらんをきく

露の身に誰をきく 全 白草於葉 全 草太

毎朝くしりの草をきく

きく草をきく草をきく

きく草をきく草をきく

きく草をきく草をきく

菊の又にかきまめや秋花 全 三路

菊の又にかきまめや秋花 全 錦綯

菊の又にかきまめや秋花 全 糸二

菊の又にかきまめや秋花 全 雲窓

菊の又にかきまめや秋花 全 風馬

菊の又にかきまめや秋花 全 完来

傘ささくく 故見くし 春の雨 竹 収
 梅くさくや 細くさく 春の雨 采 史
武蔵
 修験の糸 春の雨 柳 几
たけのこ
 鬼やうくく 春の雨 糸 鈴
洛
 中 掃や 炮烙たのく 春の雨 糸 文
今
 春の雨 春の雨 春の雨 糸 雲

國府書

春く見くく 春の雨 春の雨 天 府
 春の雨 春の雨 春の雨 不 審
 春の雨 春の雨 春の雨 菊 貫
 春の雨 春の雨 春の雨 婆 心
 春の雨 春の雨 春の雨 千 慮
 春の雨 春の雨 春の雨 丹 頌
 春の雨 春の雨 春の雨 大 万

琴瑟不絶回々々々
 苑枝
 氷柱々々動々々々
 蓼江
 幻死早又死々々々々
 蓼古
 稻芥々々々々々々
 雪風
 夕立のふりやあつた
 文呂
 々々々々々々々々々々
 榮女

吟吟吟吟吟吟
 清々々々々々々々
 の志はがらに西往東走
 一々々々々々々々
 奴々々々々々々々
 古々々々々々々々
 世々々々々々々々

慕し意芥を乞し年あり
 ありこの武勇ゆま杖を
 曳くらゝ邑の八国山に
 八百里れ清光を覧し
 懐胎峰より玉にあり
 一あしをこゝる章
 一冊子とあり

風流の縁續ぶく世に
 清くも家くれ好人
 是を挿し佩き持ち
 一はるらん癸卯菊月
 下旬雲平居其牛後

200



